

4 パネルディスカッション 「子どもの成長と遊び」

コーディネーター

中山 豊 公益社団法人こども環境学会事務局長
パネリスト

加藤 憲一 小田原市長

仙田 満 公益社団法人こども環境学会代表理事
北田 啓太・有田 早苗 酒匂中学校生徒



1 話題提供

(1) 「遊び場や子どもたちが育つ環境に関する小田原市の取組」

加藤 憲一 小田原市長

子どもの遊びは、問題解決能力を養い、困難を乗り越えることで、子どもの生きる力を向上させる。

子どもにとって遊びとは育ちそのものであり、総合計画でも4つのまちづくりの目標の一つである「いのちを大切にす小田原」の中に「子ども・教育」を位置づけており、この4月から第2期となる。

小田原市の子どもに関する事業を4つに整理してみた。

「子ども自身の生きる力を育てる」事業については、地域の見守り拠点としてのスクールコミュニティや片浦を舞台とした体験学習事業、二宮尊徳学習事業などを行っている。

「子育てを支援する」事業については、子育て支援センター事業、地域子育てひろば事業、ファミリー・サポート・センター事業、放課後児童クラブのほか毎年子育て支援フェスティバルを開催している。

「育成にかかわる人々を支援する」事業については、指導者養成研修事業（おだわら自然楽校。）、青少年リーダー育成事業、子ども会支援事業など行っている。

「生きる空間としてのまち環境を作る」事業については、プレイパークのモデル事業として上府中公園や南鴨宮富士見公園で実施した。また、現在130ある都市公園を数名で管理しているので、年2回ぐらいしか現場に行けないため、周囲の住民の方に管理・デザインしてもらえるよう公園プロデュース事業を実施しているが、市内5～6箇所でなかなか地元から手が上がらない。先ほど中学生が公園を管理したいとの提案は非常に興味深い。

小田原の代表的遊び場として先ほど提案のあった児童プラザラッコの他にわんぱくらんどがあり、非常に人気があるが小田原厚木道路のインターに近いので市外からの利用が非常に多い。



子どもに対する施策だけでなく、保護者・地域の人も含めてまち全体・空間のありかたをトータルで考えていく。子どもたちに遊び然としたものだけではなく、子どもたちがまちの中でいろいろな行動ができるようなまちづくりを行い、いろいろな能力を開発できるよう配慮していくべきだと思っている。

(2) 「子どもの成長と遊び」

仙田 満 公益社団法人こども環境学会代表理事
子どもが第一の視点が重要である。

「子どもの声がうるさい」として噴水を止めた判決があった。大人が子ども達の生活に対する許容範囲が狭くなってきた。建築の場面でもキッズ スペースを一番悪い場所に作ったり、中庭で遊ばせないようにしている。

現在、こども環境学会は子どもにやさしいまちのランキングについて研究しているが、それだけではなく、子どものため活動を国民運動としてやっていきたい。例えば、子どもの権利基本条例の作成、まちづくりに子どもに意見を言ってもらおうなど「子どもの参加」を推進することを考えている。



(3) 「遊びについて大人たちにお願いしたいこと」

北田 啓太・有田 早苗 酒匂中学校生徒

酒匂中学の1・2年生に「休日に何をしているか」についてのアンケートを実施した。

その結果、自分一人であるが40%、部活が33%、塾・習い事が8%、その他が19%であった。

「休日に友達と遊ぶとしたらどこか」については男子と女子で違いがあり、男子は自分・友達の家が48%、コロナ・シティモールが33%、その他が21%であった。女子はコロナ・シティモールなどが80%、自分・友達の家が13%、その他が7%であった。

「休日に友達と時間を過ごすとき何をしているか」では、男子はゲーム・スマホが63%、スポーツ・おしゃべりが25%、その他が21%だった。女子はおしゃべり・買い物が53%、ゲーム・スマホが34%、その他が13%だった。

小田原市にお願いしたいことは1位がスポーツ施設の開放、2位がイベント・コンテストの開催、3位が宿泊施設を作ることであった。



問1 休日はどのように過ごしているか? (274名)

自分一人	部活・塾	塾・習い事	その他
40%	33%	8%	19%

問2 休日に友達と遊ぶとしたらどこで遊ぶか?

男子	女子	その他
自分・友達の家 48%	自分・友達の家 13%	自分・友達の家 13%
コロナ・シティモール 33%	コロナ・シティモール 80%	コロナ・シティモール 80%
その他 21%	その他 7%	その他 7%

問3 休日に友達と時間を過ごすときどんなことをしているか?

男子	女子	その他
ゲーム・スマホ 63%	おしゃべり・買い物 53%	ゲーム・スマホ 34%
スポーツ・おしゃべり 25%	ゲーム・スマホ 34%	スポーツ・おしゃべり 25%
その他 21%	その他 13%	その他 13%

問4 小田原市への要望

- 1位 手軽に利用できるスポーツ施設(56人)
- 2位 イベント・コンテストの開催(46人)
- 3位 宿泊施設

2 討論

《加藤市長》

中学生が忙しいとは感覚として思っていたが、アンケートの数字であらためて見せられた。自分もそうであったが、小学生と中学生では遊びが違うと思う。中学生は思春期で内面に向けたものが出てくる。その中で、男子がゲームなどを家でやり、女子はおしゃべりが多いなど社交性があるなどおもしろいと思った。市にしてほしいことではスポーツ施設の開放が多かったが、肉体的な発散を求めているものだろう。イベントの企画を求めているのは自分たちの視点に立ってやってみたいという中学生の気持ちが表れている。

《仙田こども環境学会代表理事》

自分の中学時代 50 年前はゲームはなく、テレビもほとんどの家庭は持っていなかったの、持っている人の家に見に行った。中学生時代の休日は、本を読んだり、工作したり、絵を描いて過ごしていた。

休日も忙しくて自分の時間がないのは良くない。中学生は大人になる境であり、自分というものを考える時間があつたほうが良いと思う。休日に友人と図書館などに集まることも良いのでは。

中学生のアンケートで宿泊施設がほしいという意見は注目すべきところである。日本人は異なる文化の理解が弱いと言われている。昔は寄宿舎など長期間の共同体験があつて、異学年・異文化の人と学ぶ機会があつた。兵庫県の事例だが、5泊6日の自然学校が子ども達から好評だったようである。長めの共同体験は子どもたちが学ぶことが多いのではないかと思う。

《加藤市長》

宿泊体験として2泊3日で瀬戸内海を回るオーシャンクルーズがあつたが、予算や参加できない子どもがいることなどから、それに代わるものとして片浦を舞台とした体験学習を行っている。

この体験学習では1度に20～30人の子どもが参加している。そのエッセンスを広げて小田原ならではのものを作りたい。



《仙田こども環境学会代表理事》

中学生の北田さんと有田さんは休日に自分の時間がありますか。

《北田・酒匂中学校生徒》

部活はバドミントンをやっている。県大会で優勝するような所だが、自分としては時間はあまるほうだと思う。

休みの日はゲームなどしている。

《有田・酒匂中学校生徒》

部活は女子のバドミントン部に所属している。
男子ほど強くないが、夜の練習や塾で時間がない。
残っている時間が有効に使えていない。



《中山こども環境学会事務局長》

市長から市の取組について説明があったが、中学生として何か意見がありますか。

《北田・酒匂中学校生徒》

身近な公園プロデュース事業について希望があります。酒匂中学生徒会を中心に酒匂中近くの浜公園の整備を2年間近く行っていますが、チューリップ300個植える花壇が半分も埋まらない。生徒会の予算では難しい。

来年度も公園の整備をやりたいので市のバックアップが欲しい。

《加藤市長》

身近な公園プロデュース事業は地域の人に参加してもらいたいが、なかなか手が上がらない状況である。自治会や老人会が中心の所が多いが、酒匂中学から手が上がったという所で前向きに考えたい。

《仙田こども環境学会代表理事》

自分たちの環境は自分たちで作っていくという意識は良い。積極的な姿勢については、お金だけではなく、表彰するなどのインセンティブを与えることも有効。

《有田・酒匂中学校生徒》

旧片浦中で体験学習などを行っているが印象に残った。私もツーデーマーチで休憩したり、バドミントンで体育館を利用させてもらった。これからもいろいろ利用したい。

《加藤市長》

旧片浦中については恵まれたロケーションを生かしたいという気持ちは持っている。体験学習は小学5～6年生を対象にしているが、小・中学生に使ってもらえるよう研究したい。

《有田・酒匂中学校生徒》

昔と比べると自然が少なくなっていると思った。わんぱくらんどなどで広い場所で遊ぶと心の余裕が生まれる。

《北田・酒匂中学校生徒》

宿泊体験は貴重な体験だと思う。義務化されるとみんなで行けるので良いのでは。

《加藤市長》

修学旅行を京都・奈良ではなく、農村に入って体験型プログラムをやっている自治体もある。学習体験を中学のプログラムに入れることも一つの案である。教育委員会などにも話さないといけないが、皆さんの気持ちは受け止めたい。

《仙田こども環境学会代表理事》

自然があれば体験できるわけではない。山形での研究事例だが、自然があっても必ずしも自然の中で遊んでいない。山や川等自然の中にはリスクもある。昔は自然の中で安全に遊ぶ方法を年長の子から学んでいた。現在は遊び集団がなくなっているので、プレイリーダーも必要になる。

《会場から》

子供会の役員をしていたが、子ども中心の運営ではなく、大人が企画、宿泊体験などでも計画から子どもも参加させたい。今回参加した酒匂中が参加しているのは良いことだと思うがどのような経緯で参加したのか。

《中山こども環境学会事務局長》

市に子どもたちが参加してもらえるよう依頼した。
そこに酒匂中が参加してくれた。
大人が場を作っていくことが必要。
十分に子どもたちの意見を聞いていかなければいけないと思っている。

ワークショップの酒匂中参加メンバーで今日参加できなかった生徒がいたのは残念だが、中学生の意見として提案したのは素晴らしい活動だと思う。

北田さんは今日たくさん意見が言えましたか。

《北田・酒匂中学校生徒》

自分の意見をたくさん言えて良かった。

《加藤市長》

浜公園の活動はどのような経緯で始まったのか。



《北田・酒匂中学校生徒》

おとしから2年連続で行っている。浜公園が中学生に荒らされているという苦情が酒匂中学にあり、生徒会を中心に公園を整備することになった。

《会場から》

子どもにやさしいまちづくりは誰のための事業か？大人の視点ではなく、子どもを中心に考えなければいけないと思う。今日も酒匂中学だけでなく多くの子どもが参加し、たくさんの人の意見が聞けると良いのでは。

《加藤市長》

大人が思っていることが、子どもが思っていることと違うことも、押し付けにならないようにやっていくことを考えたい。

《仙田こども環境学会代表理事》

子どもが考える時間、提案する場が必要であり、大人は支える。一步引いた形が必要だと思う。

3 まとめ 加藤 憲一 小田原市長

本日は、平成25年度の「子どもにやさしいまちづくり事業」として実施してきた「子どもと遊びを考えるワークショップ」の1年間のまとめとして、「遊びから子どもの育つ環境を考えるシンポジウム」を開催し、この取組の意味の確認を含め皆さんと議論してきた。

「子どもにやさしいまちづくり」というのは、幅広いことで、このテーマにアプローチする体制として、意識とか、ものの見方がきちんと整っていないところがある。まだチャレンジ段階だと思っている。

「子どもにやさしいまちづくり」を考えるうえで、まず、「遊び」を取り上げたのは、仙田先生の話のように、「遊びは、ただ遊興的な意味の遊びではなく、子どもにとって、育ちそのものであり、必要な能力を獲得するプロセスそのものである」という認識があったからである。

そのようなことから、「遊び」を考えると、我々は昔からいろいろなことを失ってきたと思う。

冒頭の映像は、昭和30年代のものだが、あの頃は、映像のようなことはあたりまえのことであった。

例えば、路地空間、そこからの人の絡み方、肉体の生身で友達と接することなどは本当になくなってしまった。地域の中での向こう三軒両隣のつきあいとか、いろいろなものを失った。

今、そういうことを意識して、もう一度価値を見直し、意識的に取り戻すことが必要であるが、一方、これは大変難しいことである。



どうしても、こういうことを人為的にアプローチしていくと、不自然なものになりやすい。遊びは本来無意識であるが、そのような意識の産物となってしまうと子ども本来の自然のありかたとかけ離れる恐れがあると、同時に感じている。

いかにして地域が地域の力を回復していくか、その中で、自然に子どもらしく生きる空間を回復できるかを考えると、子どものことだけを考える政策では不自然になってしまうのではないかな。

トータルなアプローチをする中で、いつも、「これは子どもたちにとってどうなのか」という意識をしっかりとっておかないと間違えたことになるかと改めて思った。

ちょうど今、小田原は大きな投資案件が動いている局面であり、そのようなところを捉えて、「それぞれの案件が確実に子どもたちのことを意識したものになっているか」検証していく必要がある。

また、本日は中学生が来てくれたが、いろいろなことをしていく中で、小学生や、その保護者の意見を意識して聞きながら形を作っていなければいけないと、改めて思った。

次年度に向けて、こども環境学会にもアドバイスをいただきたいが、これから「子育てしやすいまちランキング」がどんどん出てくる時代で、自治体経営者にとっても怖い存在である。下位にランキングされると人口流出ということも起きかねない。

逆に言うと我々はそういった観点をしっかりやっていかなければならないと思っている。

本年度は「遊び」という切り口で行ったが、来年度はより広範な意味でのまちのあり方を「子ども」という観点からしっかり位置づけしなおしていく、そのような作業をしたいと考えている。

酒匂中学の生徒さんからは、事業の具体的な提案をしてもらったので、これも位置づけしつつ、具体的な子どもたち自身のかかわりでまちづくりを進めていきたい。